北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト

専門高校の横のつながり（学科の垣根を越えた連携）縦のつながり（産業界や中学校との連携）を結んだ12本の糸

1 キックオフミーティング

【主な内容】
◆専門高校の代表教員が参集し、本プロジェクトの概要等の説明後、R6拠点校である静内農業高校による実践発表
◆学科の垣根を越えた教員による協議
【成果】
●静内農業高校のこれまでの取組と、本プロジェクトで目指す姿を専門高校の教員が共有

産学連携コーディネーターのファシリテートによる協議

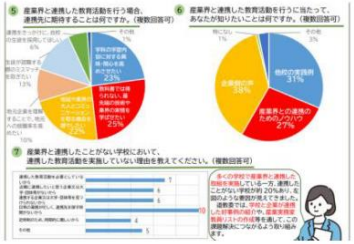
2 ONE-TEAMコミッティ（事業運営委員会）

【主な内容】
◆有識者６名で構成し、本プロジェクトの円滑な推進に向けて、専門高校の視察や産学連携に関する協議を行い、専門的見地から指導・助言（年３回開催）
【成果】
●委員による助言を踏まえて、各種イベントや次年度の取組を計画

第１回は静内農業高校で開催

3 学校ヒアリング調査

【主な内容】
◆本プロジェクトを専門高校にとって有益な取組とするため、専門高校を対象に、産学連携についての現状や考え方を把握するヒアリング調査を実施（回答数159）
【成果】
●産学連携の現状や課題を把握・共有
●調査結果を踏まえた各種イベント等における講師の選定や協議題の設定等



学校ヒアリング調査の結果

4 ONE-TEAMニュース

【主な内容】
◆本プロジェクトの取組や専門高校における産学連携の好事例、各種イベント等の情報を掲載し、専門高校や産業界に広く発信
【成果】
●専門高校や産業界の情報を広く普及・啓発
●産業界関係者からは「専門高校の取組が知れるので発行が楽しみ」との声が多数

ONE-TEAMニュース（第３号）

5 新たな産業を学ぶ機会の創出

【主な内容】
◆道経済部と連携し、出前授業（半導体、洋上風力発電）や洋上風力発電施設の見学バスツアーを実施
◆企業や自治体と連携し、校内で半導体展を開催している工業高校の先進的な事例を広く発信
【成果】
●新たな産業や働き方に関する生徒や教員の理解促進

洋上風力発電施設の見学

6 各種教員向けセミナー

【主な内容】
◆道の建設部や経済部、建設業協会等の関係機関と連携し、教員向けセミナーを開催
▶ 建設DX（33名） ▶ 半導体（94名）
▶ 観光産業（36名） ▶ 洋上風力発電（35名）
【成果】
●新たな産業への教員等の理解促進
●全国から多くの参加があり、道外の先進地域とのネットワークが強化

半導体理解促進セミナー（チラシ）

【図 59】令和６年度成果概要図（２ページ目／全３ページ）

北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト

7 中学校に向けた専門高校の魅力発信

【主な内容】
- ◆中学生やその保護者、中学校教員の専門高校に関する理解を深めるため、「職業学科理解推進ガイド」を発行
- ◆中学校教員を対象に、オンラインで「職業学科理解促進セミナー」を初開催

【成果】
- ●中学生や教員等の専門高校に関する理解を促進
- ●専門高校の価値や魅力の発信

職業学科理解推進ガイド

8 産学連携シンポジウム

【主な内容】
- ◆教員や産業界関係者合わせて137名が参加し、静内農業高校の産学連携の事例を共有
- ◆生徒３名と企業・経済団体等の関係者５名によるサステナブルな産学連携をテーマとしたパネルディスカッション

【成果】
- ●教員と産業界関係者が、産学連携のノウハウや持続可能な産学連携の在り方を共有

パネルディスカッションの様子

9 高校生チャレンジ in どさんこプラザ

【主な内容】
- ◆農業・商業・水産科の生徒が、学科の垣根を越えて連携し、企業と協働で開発した商品をJR札幌駅構内にある北海道のアンテナショップ「どさんこプラザ札幌店」で販売（参加校数：７校、出品商品数：９品）

【成果】
- ●６次産業化を体験的に学ぶ機会を創出
- ●専門高校の価値や魅力を発信

販売を担当した生徒達

10 産学連携カンファレンス

【主な内容】
- ◆専門高校の教員85名と生徒20名、産業界関係者68名が参集し、厚岸翔洋高校（マイスター・ハイスクール）による実践発表等
- ◆専門教員や産業界関係者に生徒が加わり、産学連携をテーマとしたグループ協議

【成果】
- ●生徒の実体験を参考にしながら、参加者が持続可能な産学連携の方法等を共有

生徒、教員、産業界関係者による協議

11 おしごとガイドブック～2024年度版～

【主な内容】
- ◆中高生が新たな産業や働き方に関する理解を深めて職業を選択することや、中学生が専門高校の魅力や学習内容等を踏まえて進路を選択することをねらいとして、ガイドブックを制作し、高校１、２年生に配付

【成果】
- ●中高生やその保護者の新たな産業や専門高校への理解を促進

おしごとガイドブック～2024年度版～

12 産業実務家教員リスト

【主な内容】
- ◆出前授業や現場見学など、謝金や旅費等が不要で、専門高校との連携が可能な企業等の情報を掲載したリストを作成し、専門高校に配付（掲載数：36事業所等）

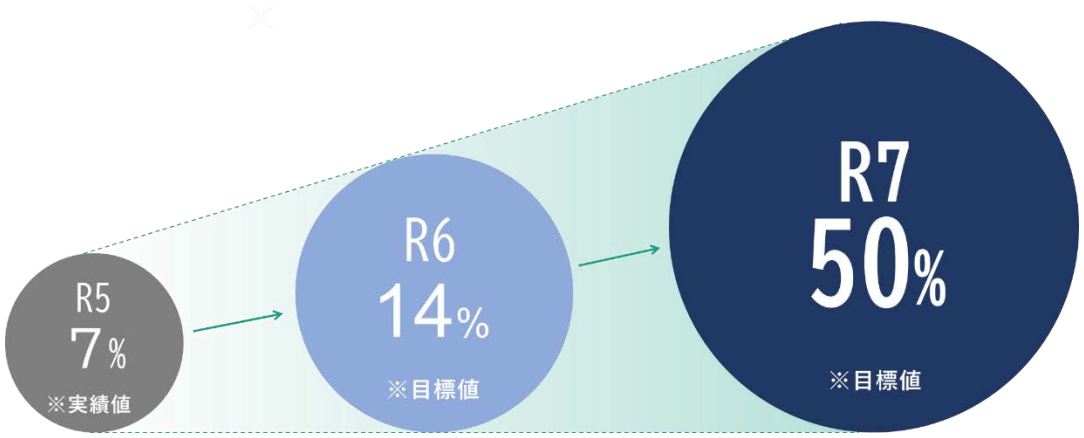
【成果】
- ●学校にとって負担の少ない産業界とのサステナブルな連携が実現

産業実務家教員（募集チラシ）

事業１年目における【成果○】と【課題△】	対応	事業２年目における体制の強化	将来	本プロジェクトで目指す姿
【成果○】静内農業高校の産学連携のノウハウを普及 【課題△】専門高校が分散している広域な北海道で、各地域の産学連携を推進する体制の整備		◆北海道を４圏域に分割し、各圏域に拠点校を配置 ◆各圏域ごとに参集によるイベントの開催が可能になり、地域に根差した産学連携の推進が可能		地域を支える最先端の職業人材の持続的な育成 → 地域創生の実現

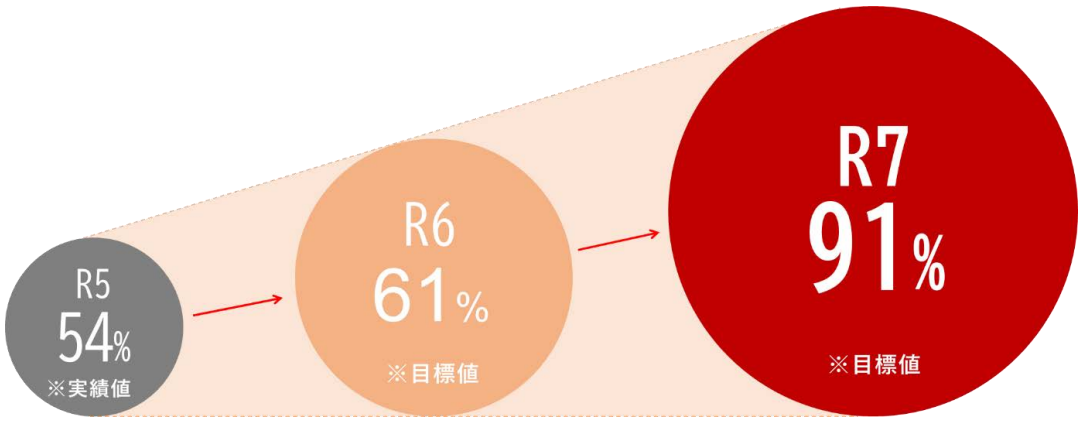
5　成果指標

【指標①】
コンソーシアムの構築や産業実務家教員による指導の教育課程への位置付けなど、産業界との連携・協働体制を組織的に構築できている専門高校の割合
（対象）道立の専門高校（56 校）



※令和６年度の実績値は令和７年５月に集計

【指標②】
産業界の有識者を招いた協議等の機会を設けて、地域の人的・物的資源を活用しながら教育活動を行っている専門高校の割合
（対象）道立の専門高校のうち、農業科・工業科・商業科・水産科（54 校）



※令和６年度の実績値は令和７年５月に集計

6　参考資料

（1）北海道創生ジャーナル「創る」第 29 号（令和７年３月 18 日発行）

創る ◆地域を創る人づくり

北海道教育委員会

第二弾「北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト」

地域を創る人づくり

北海道が将来にわたって輝き続けていくためには、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念の下、地域への愛着・誇りを育み、夢や希望をもって地域の未来を切り拓く人材の育成を行うことが、地域づくりを支えることとなります。北海道教育委員会では、高等学校と地域との協働による活動や、地域の課題に対して探究的な学びを推進する活動などをとおして、生徒の多様な可能性を育み、将来の北海道を支える人材の育成に取り組んでいます。

地域創生を支える専門高校

本道が人口減少等の課題を乗り越え、地域創生を実現していくためには、地域の人材育成を担う教育の役割が重要であり、北海道教育委員会では、生徒が、地域の人々の生き方や産業などに触れることを通して、地域への理解を深め、自らの生き方について考えるなどの体験的な学習の充実に努めています。

とりわけ、地域創生を支える人材育成の核となる道立高校における職業教育は、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、福祉の職業教育を主とする学科を設置する高校（以下「専門高校」という。）を中心に行っています。

広域分散型の地域特性を有する北海道の特性上、学科や地域産業の特性等に応じて、56 校(注)の道立専門高校が分散して設置されており、地域で活躍する職業人を育成するとともに、勤労観・職業観の育成、豊かな感性や創造性を養う総合的な人間教育の場としても大きな役割を果たしています。

(注)令和６年度入学者選抜実施校数に基づく。

専門高校と産業界とのサステナブルな連携に向けて

こうした中、北海道教育委員会では、令和６年度からの２か年事業「北の専門高校ＯＮＥ-ＴＥＡＭプロジェクト」に取り組んでいます。

本プロジェクトは、静内農業高校が国の「マイスター・ハイスクール事業」（令和３～５年度）で構築した職業人材育成システムを参考にして、専門高校と産業界のサステナブル（持続可能）な連携体制を構築することを目的としています。

本プロジェクトでは、横と縦の２つの視点で、専門高校を支援しています。

１つ目は、「横」のつながりとして、農業高校と工業高校など、専門高校が学科の垣根を越えて連携し、効果的な職業人材育成システムの取組を、他の専門高校に自走可能な形で横展開することです。

２つ目は、「縦」のつながりとして、専門高校と、企業や中学校との連携を促進するとともに、専門高校の価値や魅力を普及・啓発することです。

また、これらの取組を円滑かつ効果的に実行するため、高校教育課では、産業界等の有識者で構成される事業運営委員会「ＯＮＥ-ＴＥＡＭコミッティ」を設置・運営しています。

年３回開催される会議では、本プロジェクトの推進に向けて、専門高校の視察や産学連携に関する協議を行い、専門的見地から助言等をいただいています。

下の図は、本プロジェクトの令和７年度概要図であり、高校教育課に配置している産学連携コーディネーターを中心として、専門高校を支援する様々な取組を行っています。

09

【図 61】北海道創生ジャーナル「創る」第 29 号（１ページ目／全２ページ）

※本事業に関係するページのみを抽出

今後に向けて

令和６年度は、拠点校である静内農業高校の協力の下、札幌市内において開催した各種イベント等を中心として、専門高校における産学連携の充実を図ってきました。

令和７年度は、広域な北海道において、専門高校が各地に分散している現状を踏まえ、４つの圏域ごとに、地域の産業界等と連携して、効果的な人材育成に取り組んでいる専門高校の中から拠点校を設定し、各圏域ごとに学校や産業界等の関係者が参集するイベントを開催することとしています。

北海道教育委員会では、こうした取組を通じて、専門高校と地域の産業界との連携を一層推進するとともに、生徒が地域に愛着をもつことや、地域の産業への理解を深めるための教育を推進し、地域の産業を支える人材の育成に取り組んでいきます。

【令和７年度拠点校】
- 小樽水産高校（道央）
- 室蘭工業高校（道南）
- 旭川商業高校（道北）
- 更別農業高校（道東）

本プロジェクトの公式ロゴマーク
（中央の７つの星は７つの職業学科を意味している）

本プロジェクトのWebページ

特徴的な取組

●新たな産業や技術革新への対応

新たな産業や技術革新に対応した学習の充実に向けて、道経済部と連携し、様々な取組を実施しています。

大学教授等による半導体に関する出前講座を高校25校で実施したほか、高校教員や企業関係者等を対象に、半導体関連企業や自治体と連携して人材育成に取り組んでいる苫小牧工業高校や熊本県教育委員会の取組などを紹介する「半導体理解促進セミナー」を開催しました。

また、洋上風力発電に関するメンテナンス人材の育成・確保に資する取組として、工業高校や水産高校の生徒を対象に、企業関係者を講師とした出前授業を実施したほか、工業高校３校において、洋上風力発電施設の見学バスツアーを実施しました。

●産学連携シンポジウム

高校と産業界のサステナブルな連携に向けて、企業・教育関係者等が産学連携の意義等を共有することを目的として開催しました。

「産業界と連携した学びで私が得たもの」と題した生徒による発表後、生徒や経済団体・企業関係者など８名によるパネルディスカッションを行いました。

産業界の関係者からは「業界全体を考えて、人材育成につながる産学連携に取り組むことが重要」などの意見があったほか、高校生からは「出前授業は貴重な機会だが、企業の方と初対面では質問もしづらいので、長期的な関わりの機会が欲しい」などの発言があり、参加者にとって、産学連携の在り方や今後の地域の担い手の育成について考える貴重な機会となりました。

●おしごとガイドブック

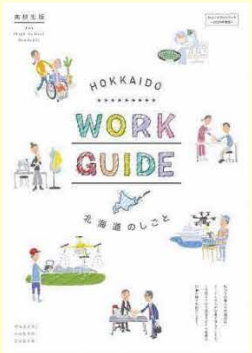
新たな産業や働き方とともに、専門高校に関する理解を深めることを目的として、「おしごとガイドブック」を制作し、全道の中学校と高校の１、２年生に配付しました。

内容は、半導体関連産業や洋上風力発電、インバウンド観光に加え、ＤＸなどを活用した建設業、農業、水産業など、地域創生を支える産業の担い手として活躍している専門高校卒業生の姿を紹介しています。

このほか、専門高校における「縦」のつながりとして、企業と連携して実習等に取り組んでいる事例、「横」のつながりとして、農業高校と工業高校など、学校や学科の垣根を越えた専門高校同士の連携事例も紹介しています。

さらに、中学生版には、農業、工業、商業を学ぶ生徒３名による座談会の様子も掲載しています。

なお、電子データは、道教委のＷｅｂページに掲載しています。



本記事の取組は、北海道教育庁学校教育局高校教育課で担当しております。
10　お問い合わせ先／ TEL:011-204-5705

【図 62】北海道創生ジャーナル「創る」第 29 号（２ページ目／全２ページ）
※本事業に関係するページのみを抽出

（2）新聞記事

北海道通信（日刊教育版）令和６年６月19日（水）

静内農高でＯＮＥ－ＴＥＡＭコミッティ

産業界との連携充実を

道教委 道内専門高校へ横展開

【苫小牧発】道教委は14日、静内農業高校で北の専門高校ＯＮＥ－ＴＥＡＭプロジェクト「第１回ＯＮＥ－ＴＥＡＭコミッティ」を開催した＝写真＝。道教委担当者が事業の趣旨等を説明し、連携が可能な企業等の開拓や、教員・企業研修などを行い、専門高校と産業界との連携を一層充実させていくことを確認。高校教育課に新たに配置した産学連携コーディネーターを中心に、専門高校と産業界等をつなげるネットワークの構築や、新たな産業や先端技術者を紹介した「お仕事ガイドブック」の作成・配布を進めることなどを申し合わせた。

道教委は、文部科学省の６年度マイスター・ハイスクール普及促進事業の採択を受け、本年度から北の専門高校ＯＮＥ－ＴＥＡＭプロジェクトに着手。３～５年度の国のマイスター・ハイスクール事業において静内農業高が構築した職業人材育成システムを道内の専門高校に広く横展開するとともに、産業界と専門高校の持続可能な連携の充実を目指している。

事業運営委員会「ＯＮＥ－ＴＥＡＭコミッティ」では、産学連携に係る課題解決に向けた協議、教員・企業向け研修の企画や事業の評価・改善を推進。プロジェクトを円滑に進めるため、年度計画や産学連携の充実に向け、専門的見地から指導助言を行う。

第１回コミッティには委員６人が出席した。

はじめに、道教委高校教育課の今井貞課長補佐が事業概要を説明。「連携した取組が継続しづらい」「ニーズ等が異なり、連携が進みづらい」など、専門高校と産業界の連携における課題を挙げた上で、連携が可能な企業等の開拓や、教員・企業研修の実施などによって、専門高校と産業界との連携を一層充実させる考えを示した。

また、高校教育課に新たに配置した産学連携コーディネーターの主な役割である専門高校と産業界等を人的につなげるネットワークの構築、謝金等が不要な職業人等をデータベース化する産業実務家教員リストの作成、新たな産業や先端技術者を紹介した「お仕事ガイドブック」の作成・配布について説明した。

続いて、静内農業高の赤穂悦生校長と工藤淳教頭が拠点校における自走化に向けた取組について説明。道内専門高校への横展開を見据え、マイスター・ハイスクール事業で構築してきた取組内容や機能のコンパクト化を図るとともに、現在の教育水準の維持・向上を図る考えを示した。

このあと、同校食品科学科２年の科目「食品製造」、生産科学科園芸コース２年の科目「野菜」、生産科学科馬事コース２年の科目「馬利用学」の実習を見学したほか、本年度の事業計画に関する協議を実施。協議では「産業界との連携を持続的に行うためには、一部の担当者のみに仕事が集中するのではなく、学校全体で取り組む組織体制の構築が重要」「地域に応援される学校であることが大切」などの意見が上がった。

第２回コミッティは10月に開く予定。また、道内の専門高校の代表者が一堂に会する「キックオフミーティング」を７月８日に札幌市内の第二水産ビルで参集とオンラインによるハイブリッドで開催する。

北の専門高校ＯＮＥ―ＴＥＡＭが会合

静内農高 産学連携

ノウハウを普及

道教委 持続可能な連携へ

道教委は8日、北の専門高校ＯＮＥ―ＴＥＡＭプロジェクトキックオフミーティングを札幌市内の道第二水産ビルおよびウェブ会議システム併用で開催した＝写真＝。事業概要や静内農業高校におけるマイスター・ハイスクール事業の成果、専門高校と産業界のサステナブル（持続可能な連携の在り方などについて共有。今後、静内農業高が取り組んできた産学連携のノウハウを道内の専門高校に普及・拡大していくことを確認した。

同プロジェクトは、文部科学省の採択を受け、本年度から実施するもの。マイスター・ハイスクール事業で静内農業高が構築した職業人材育成システムを道内の高校に広く横展開するとともに、産業界と高校の持続可能な連携の充実を目指している。

ミーティングには、事業運営委員や専門高校の職業学科担当教諭、教育局の指導主事らオンラインを合わせて約１００人が参加した。

開会に当たり、高田安利高校教育課長は同プロジェクトの趣旨を説明した上で、様々な情報交換を通して、学科の垣根を越えて、各学校や生徒・地域の実情に応じた今後の産業界との連携に生かすよう求めた。

引き続き、静内農業高の工藤淳教頭がマイスター・ハイスクール事業の自走化に向けた取組を発表した。

同校は、５年度まで３ヵ年で実施したマイスター・ハイスクール事業で「地域発次世代イノベーター人材の育成～持続可能な日高農業の創り手」をテーマに研究を推進。行政機関、企業、法人、団体、大学と協働で食品産業、園芸、馬産などの農業・農業関連産業を支える人材育成を目指して取り組んできた。

工藤教頭は、３年間の研究成果を振り返り「場当たり的で振り返りのない授業・イベントは、学習効果が低い」とし「探究のサイクルを意識した外部人材の活用が大切」と強調した。

また、同校教育振興会の会員や関係機関、賛助会員らで構成する「静農コンソーシアム」を秋ごろの発足を目指して準備を進めていることを報告した。

続いて、藤田朋軌キャリア教育指導係長が事業概要を説明。道内の高校の産業界と連携した好事例を紹介したほか、同課に配置した産学連携コーディネーターの役割などを解説した。

道建設部や経済部、北海道建設業協会等の関係機関と連携した教員向けセミナーを開催することを報告。建設ＤＸや６次産業化、洋上風力発電に関する取組を進め、産業構造の変化や新たな働き方への理解促進を図る方向性を示した。

このあと、前年度まで同校のマイスター・ハイスクールＣＥＯを務めた北海道農産協会の桑名真人てん菜部長が「専門高校と産業界のサステナブルな連携の在り方」をテーマに基調講話したほか、月館海斗産学連携コーディネーターをファシリテーターにグループ協議を実施。参加者からは「学校を理解してくれる地域が増えてほしい」「学校と地域がウィンウィンになるような取組を進めたい」などの声が上がった。

道建設部と道教委が初のセミナー

建設ＤＸの理解促進へ

岡崎氏（荒井建設）が教員に講演

道建設部と道教育委員会は26日、教員向け建設ＤＸ理解促進セミナーをオンライン開催した。普通科高校などにも間口を広げ、進路指導担当教諭や教育局のキャリアプランニングスーパーバイザーらを対象に建設業への理解促進を図る新たな試み。荒井建設㈱（旭川）の岡﨑竜志取締役土木技術部長は「ＤＸ化に伴い変革が進む建設業における業務内容と働き方」をテーマに講演し、業界の魅力を強力にＰＲした。

セミナーは、担い手の確保・育成が最たる課題として位置付けられる本道建設業への入職促進を目的に開催。ＩＣＴ技術の活用をはじめ、働き方の選択肢が広がっている建設業の魅力を普通科高校の進路指導担当教諭らに伝え、専門的な学習を積む生徒以外にも間口を拡大して入職の可能性を探っていく。

講演では、荒井建設の岡﨑取締役土木技術部長が、土木工事と建築工事の違いや自然災害の対応をはじめとする建設業の使命を紹介。本題のＤＸに関しては、ＩＣＴやＢＩＭ／ＣＩＭの活用が一般化してきている状況を示し「一昔前とは異なり、工業高校や高専で専門的な学習を積んできた方だけでなく、普通科高校の卒業生や女性が活躍する場面が確実に増えている」と強調した。

つぎに、建設ディレクター協会の藤田歩実氏が「建設業における新しい職域〝建設ディレクター〟について」と題して説明。具体的には、ヤマグチ㈱（鹿児島）土木部工事管理室の馬場洋介氏が育成面、長坪和氏と原田杏瑞氏がやりがいの観点から建設ディレクターの重要性を示した。

事例発表では、室蘭工業高校環境土木科長の鈴木圭吾教諭が「地元建設業協会と連携した企業実習の取組」をテーマに解説。企業実習の実施に至った経緯や本年度から３ヵ年の工程表などを紹介し、「企業と生徒が対話できる貴重な機会。建設現場の魅力を伝えることで、業界全体のイメージアップにもつながっている」と成果を口にした。

セミナーに参加した高校からは「建設業の新たな働き方を深く知ることができて有意義だった。関心を抱く生徒たちも多いと思うので、きょう得た情報を正確に伝えたい」などと初めての取組の有効性を示す意見が多く聞かれた。

職業学科理解推進ガイド
中学生の進路選択に
ＯＮＥ―ＴＥＡＭ 学習内容紹介

道教委

道教委は、本道産業の担い手を育成する本年度新規事業「北の専門高校ＯＮＥ―ＴＥＡＭプロジェクト」の一環で、中学生の進路選択に役立つリーフレット「職業学科理解推進ガイド」を作成した。道内公立高校に設置している職業学科７科の学習内容を一挙掲載。小学科ごとの学びのカテゴリーや実習テーマ、就職先などを紹介している。

同ガイドは、中学生や保護者、中学校教員に、職業学科についての理解を一層深めてもらうため作成したもの。道内の公立高校に設置されている農業、工業、商業、水産、家庭、看護、福祉の七つの職業学科ごとに、学びのカテゴリーや小学科の学習内容、実習テーマなどを掲載している。

農業科では「生産技術・経営」「食品」「国土の保全や環境創造」「植物や動物、地域資源の活用や地域振興」に関することの４点を学びのカテゴリーとして分類。工業科では「機械系」「電気系」「情報系」「建築系」「土木系」「化学系」の６分野における教育活動を紹介している。

商業科では、基礎的科目、総合的科目のほか「マーケティング」「マネジメント」「会計」「ビジネス情報」の４分野における学習内容を掲載している。

水産科では「海洋漁業系」「海洋工学系」「情報通信系」「資源増殖系」「水産食品系・その他」の四つのカテゴリーに分類。また、漁業を学び、国際交流も行う乗船実習や「若竹丸」「北鳳丸」の２隻の実習船を紹介している。

家庭科では、江別高校の生活デザイン科と当別高校の家政科が該当する「家政系」を紹介。

美唄聖華高校と稚内高校で設置する看護科では、多様な看護の場面を想定した実習を行う「衛生看護科」の実習内容を伝えている。

福祉科では、置戸高校の福祉科をはじめ、留寿都高校の農業福祉科農業福祉コース、剣淵高校の総合学科生活福祉系列など、介護福祉士国家試験の受験資格が得られる教育活動を紹介している。

道教委は、同ガイドを活用し、職業学科への理解を深める参考資料とするなど、中学校の進路指導に活用するよう呼びかけている。

職業学科理解促進セミナー初開催

中学校進路指導充実へ

道内７学科の特色など解説

道教委

道教委は7日、オンラインで中学校教員向け職業学科理解促進セミナーを初開催した。先に作成した「職業学科理解推進ガイド」を活用しながら道内の職業学科7学科の教育活動の特色や小学科の教育内容などを解説。説明は、道教委高校教育課キャリア教育指導係が担当し、高校の職業学科への理解の深化、中学校における進路指導の一層の充実につなげるよう呼びかけた。

セミナーは「北の専門高校ONE－TEAMプロジェクト」の一環。中学校教員が高校の職業学科に関する理解を深め、中学校における進路指導の一層の充実を図ることをねらったもの。

道教委高校教育課キャリア教育指導係の各担当者が①農業科②工業科③商業科④水産科⑤家庭科⑥看護科⑦福祉科－の順で一コマ当たり15分程度で説明。各説明には、先に作成した「職業学科理解推進ガイド」を活用した。

農業科では、農業高校での学びのカテゴリーとして「生産技術・経営」「食品」「国土の保全や環境創造」「植物や動物、地域資源の活用や地域振興」の4点を示し、各カテゴリーにおける教育活動を伝えた。

また、農業高校生全員が農業クラブ員となり、農業学習を通して、科学性・社会性・指導性の向上を目指して学習や特別活動に取り組む「農業クラブ活動」を紹介した。

工業科では、学びのカテゴリーとして「機械」「電気」「情報」「建築」「土木」「化学」の6点を示し、写真と共に主な学習内容や就職先、取得できる資格などを紹介。それぞれの学科の特徴などについて理解し、一人ひとりの希望を尊重した進路指導を行うよう呼びかけた。

商業科では、教科「商業」の科目の構成について商業における基本的な事項を学ぶ科目として「ビジネス基礎」「ビジネス・コミュニケーション」を示し、特に「ビジネス基礎」は全ての商業に関する学科で履修することとなっていることを伝えた。

また、総合的科目として、ビジネスに関する課題について、調査・研究する科目「課題研究」や「総合実践」などを紹介した。

水産科では、小樽水産高校、函館水産高校、厚岸翔洋高校の水産科設置校3校のほか、海技士の上級資格取得を目指す専攻科「漁業科」「機関科」や、総合無線通信士や特殊無線技士など通信・電気に関わる資格取得を目指す専攻科「情報通信科」を紹介した。

家庭科では、江別高校生活デザイン科の「服飾コース」と「染織インテリアコース」、当別高校家政科の「保育コース」と「食物調理コース」の活動や主な検定などを伝えた。

看護科では、美唄聖華高校と稚内高校において、高校の看護に関する3年間の学科とその後の2年間でさらに専門性を高める専攻科において5年間の一貫したカリキュラムで看護師を養成するための教育を行う「5年一貫教育」を実施していることを紹介した。

福祉科は、学科設置校の置戸高校において、2年度から4年連続で介護福祉士合格率100％となっていることを報告。また、3年で介護福祉士の受験資格が得られる「プロフェッショナルコース」と介護職員初任者研修（旧ホームヘルパー2級）の資格取得を目指す「ダイバーシティコース」の2コースを紹介した。

道教委　初の産学連携シンポジウム

持続可能な体制構築へ

専門高校3校生徒が発表

道教委は18日、道第二水産ビルで「北の専門高校ONE－TEAMプロジェクト」産学連携シンポジウムを初開催した。農業・工業・商業の学科を設置する専門高校3校の生徒や国分北海道㈱人事総務部の萩庭寿人部長による事例発表、高校生と産業界によるパネルディスカッションを実施。専門高校と産業界との連携でもたらす効果について共通理解を図ったほか、今後も同プロジェクトを通して双方の連携を深め、北海道を一層盛り上げていくことを確認した。

シンポジウムには、道内企業や経済団体等の関係者、教育関係者らオンラインを合わせて約140人が参加した。

開会に当たり、高校教育課の今井真課長補佐があいさつ。シンポジウムの成果を高校と産業界とのさらなる連携の推進につなげるとともに、今後の専門高校と産業界の持続可能な連携体制の構築に向けて実り多い機会となるよう期待した。

続いて、同課キャリア教育指導係の藤田朋軌教育指導係長が事業概要を説明＝写真＝したあと、静内農業高校生産科学科3年の三浦聖晴さん、札幌工業高校土木科3年の飯島道大さん、旭川商業高校流通ビジネス科3年の佐藤藍さんが「産業界と連携した学びで私が得たもの」をテーマに事例発表した。

三浦さんは、同校馬事コースで日本中央競馬会や日本軽種馬協会等と連携して行った繁殖牝馬の繁殖期における裂蹄（れってい）の処置に関する研究内容を発表。「今後も地域の関係機関と連携し、優良な競争馬を生産するため、残り数ヵ月の学校生活を過ごしていきたい」と意気込んだ。

飯島さんは、河川の生態系や治水を学ぶ環境学習、先端技術講義など、建設業者や大学等と連携した取組を紹介。産業界と連携した学びで得た経験をもとに「今後、高度専門キャリアを目指し、地域産業を支え、地元に貢献できる人材になりたい」と胸を張った。

佐藤さんは、同校と旭川農業高校が連携し、互いの強みを生かして旭川や産業全体の活性化につなげる「project A」の実践を発表。「専門分野である商業知識を応用し、プロモーション活動を行ったことで、販売促進だけではなく自分たちの学習をあらためて復習するきっかけになった」と振り返った。

生徒の発表を受け、萩庭部長が「専門高校との連携が企業にもたらす効果について」と題して事例発表を行った。同社の概要や専門高校と産学連携に至った経緯などを説明した上で、静内農業高のマイスター・ハイスクール事業への参画、水産高校と共同した缶詰開発、展示商談会に高校ブースを出展し、商談機会を提供していることなどを紹介した。

このあと、同プロジェクトの月館海斗産学連携コーディネーターの進行のもと「専門高校と産業界のサステナブルな連携の在り方」と題してパネルディスカッションを実施。事例発表した4人に、道経済連合会の百瀬康弘常務理事、㈱砂子組企画営業部の真坂紀至部長、ことし3月に静内農業高を卒業し国分北海道に就職した高橋柚珠乃さんをパネリストに加え、熱い討論を展開した。

道教委　半導体理解促進セミナー

道内での人材育成必要

北大・葛西教授招き初開催

道教委は14日、北の専門高校ＯＮＥ－ＴＥＡＭプロジェクトの一環で半導体理解促進セミナーをオンライン開催した＝写真＝。北海道大学総長補佐・量子集積エレクトロニクス研究センターの葛西誠也教授が「半導体の今と未来について」と題して講演。葛西教授は、携帯電話やゲーム機を例に、半導体技術の進化について解説したほか、今後道内において半導体人材を育成する必要性を示した。

セミナーは、マイスター・ハイスクール普及促進事業「ＯＮＥ－ＴＥＡＭプロジェクト」の一環で初開催したもの。

高校教員等が先端半導体に関する理解を深め、本道産業構造の変化に対応した指導の充実を図るとともに、高校と産業界等が一体となった半導体人材育成の取組を推進することをねらった。

当日は、公立高校の進路指導を担当する教諭や理科および工業等の教科指導を担当する教諭、各教育局のキャリアプランニングスーパーバイザー、半導体関連産業の企業・経済団体関係者ら約１００人が参加した。

葛西教授の講演では、携帯電話を例に「半導体とは何か」について説明。携帯電話の中の部品を写した写真を示し「マイクロプロセッサやカメラのセンサーなどに含まれる半導体が様々な機能を実現し、私たちの暮らしに役立つ便利なものを提供している」と解説した。

また、ゲーム機を例に半導体の変遷にも触れ「初期から後期に移るにつれて作られている回路が細かくなっている」などと、ここ数十年で半導体技術が猛スピードで進化していることを伝えた。

このほか、半導体関連産業が道内において増えている現状を示し、道内で半導体人材を育成する必要性を強調。「半導体は裾野が広い産業であり、様々な分野の人が関わることができる。単に電子・電気だけではなく、情報や材料、機械など各分野で活躍できる人たちにも半導体産業に関わってほしい」と訴えた。

続いて、熊本県教委高校教育課産業教育指導班の増田健治主幹が「熊本県における半導体関連産業を支える人材育成の取組」について説明した。

増田主幹は、知事部局が推進する半導体認知度の向上を目指した動画制作の取組や、市町村が行う半導体研修受講支援に対する補助事業などを紹介。また、熊本大学で半導体に関わる課程を新設したことや県立技術短期大学で新学科を設置したことなど、高等教育機関において高度な半導体人材育成に取り組んでいることを伝えた。

このあと、平成29年３月に名寄産業高校電子機械科を卒業し、現在、ミツミ電機㈱千歳事業所ウエファ製造部生産設備課で勤務する上野龍之介さんが「半導体製造装置メンテナンスエンジニアの仕事とやりがい」について説明。

また、苫小牧工業高校情報技術科の田中俊正教諭が「企業と連携して取り組む半導体を通じたＳＴＥＡＭ教育の実践」をテーマに事例発表した。

参加者からは「歴史的な部分も含めて、半導体の現状や今後の課題等が分かった。先進県の取組も知ることができた」「半導体がどのように役立っているのか、半導体のこれまでの進化についてよく分かった」などの感想が寄せられた。

ONE―TEAM 4Sサミット

縦横のつながり構築へ

持続可能な取組目指し道教委

道教委は24日、札幌市内の道第二水産ビルで北の専門高校ONE―TEAMプロジェクト「4Sサミット」を開催した―写真―。㈱セコマ商品本部の辻道雅彦取締役本部長が「北海道に根差した企業が抱える人材育成～未来の北海道産業を考える」と題して講演したほか、企業や中学校とのサステナブルな連携や職業学科の垣根を越えた連携の在り方について協議を展開。職業人材の持続可能な取組について共通認識を持つ場となった。

開会に当たり、道教委高校教育課の高田安利課長があいさつに立ち「サミットの内容を企業や産業界、専門高校の各部会等に持ち帰っていただき、今後の専門高校と産業界とのさらなる連携の推進に生かしてほしい」と期待した。

辻道本部長の基調講演では、同社の歴史や食品製造の流れ、物流の仕組みなどを解説。辻道本部長は「食料基地としての北海道の様々な食材をどのように消費者まで届けるかがわれわれの重大な使命」と強調した。

続いて、自治体とのまちづくり協定や災害時の物資供給協定など地域に根差した特色ある取組を紹介。また、食品ロス削減に向けたリサイクル事業や地域からの要請に応えて出店した事例などを伝えた。

このほか、高校生が考えたスイーツを競い合うコンクール「ハイスクールパティシエロワイヤル」や「フードロス削減アイデアコンテスト」など、高校生と産業界が連携した持続可能な取組を紹介した。

最後に、同社が求める人材として「失敗を恐れず様々なことに挑戦できる人」「自ら学び成長する人」「自ら考え実行できる人」などを挙げ「企業目的に共感し、北海道の人々・会社に誠実に向き合う人を求めている」と話した。

講演後には「縦のつながり～企業や中学校とのサステナブルな連携の実現に向けて」「横のつながり～職業学科の垣根を越えた専門高校ONE―Teamの実現に向けて」の二つを議題に協議。はじめに、高校教育課キャリア教育指導係の藤田朋軌係長が同事業の趣旨および次年度の方向性などについて説明した。

藤田係長は、次年度から農業・工業・商業・水産において拠点校を各1校選定し、4校体制で取組を進めていく方向性を提示。広域な北海道で、専門高校が分散している現状を踏まえ、四つの圏域に拠点校を設定することで地域ごとに参集によるイベントが開催できる利点を示した。

参加者からは「産業界と学校の双方にメリットがないと持続可能なものにするのは難しい」「職業高校で学ぶ教育内容を知ることや業界・企業としての魅力を高校に発信するなど、相互に理解することが大切」などの意見が上がった。

道教委　産学連携カンファレンス

持続可能な体制構築へ

高校・企業のつながり深める

道教委は20日、札幌市内の道第二水産ビルで、北の専門高校ＯＮＥ－ＴＥＡＭ プロジェクト産学連携カンファレンスを開催した＝写真＝。厚岸翔洋高校が産業界との連携やＩＴ技術を活用した取組事例を発表したほか、教員、生徒、企業、経済団体の関係者によるグループ協議を実施。産学連携体制の重要性や意義、今後の在り方について活発に意見を交わし、相互のつながりを深めた。

道教委は本年度から同プロジェクトを開始。専門高校と産業界が連携して取り組んできた職業人材に係る教育活動を広く展開し、持続可能な連携の充実を図ることを目的としている。

専門高校の職業学科の担当教諭や代表生徒、企業・経済団体の関係者ら約１４０人が参加した。

開会に当たり高校教育課の高田安利課長があいさつ。産業界と連携している専門高校の取組や成果を共有し、持続可能な連携体制の構築につながるよう会議の成果に期待を寄せた。

続いて厚岸翔洋高の長谷川智人教頭が３年間で取り組んできた産学連携の取組事例を発表。漁獲データのデジタル化、水中ドローンの有効活用、アメマスを有効利用したかまぼこの製品化など探究活動を紹介した。企業・関係機関と連携する際の留意点も解説し、連携の目的の明確化、業務平準化を踏まえた役割分担など組織体制のポイントを示した。

発表後、教員、企業関係者、生徒で意見交換を実施。地域の担い手を育成する専門高校の役割、産業界と連携した生徒たちの探究活動や自身の成長について話し合った。

参加企業からは「企業とのつながりをつくるため、教員に技能実習に参加してもらってはどうか」「小中高生向けの企業体験フェスティバルを行ってみたい」などの提案があり、今後の連携の足掛かりにしている様子だった。

道教委は７年度から農業、工業、商業、水産分野に係る拠点校を道内４圏域で指定し、同様の会議を各圏域において開催することを計画している。産業界との連携・協働体制を組織的に構築している専門高校の割合を14％から７年度末までに50％に引き上げることを目指しており、連携をさらに進めていく考えだ。

道教委　観光産業理解促進セミナー

人材の育成・確保を

データ活用、地域連携も

道教委は2月19日、オンラインで北の専門高校ONE－TEAMプロジェクト「観光産業理解促進セミナー」を開催した。北海道観光機構事業企画本部の生川幸伸副本部長と小樽観光協会の永岡朋子事務局次長が観光に関する取組についてそれぞれ講演。データを活用した観光振興や地域との連携の重要性、観光人材を育てることで、観光客の再訪につながることなどを説いた。

セミナーは、高校教員等が観光産業に関する理解を深め、本道産業構造の変化に対応した指導の充実を図るとともに、高校と産業界が一体となった観光産業を担う人材育成の取組を推進するもの。公立高校等の進路指導を担当する教諭等、商業や総合的な探究の時間等で観光に関する取組を担当する教諭をはじめ、各教育局のキャリアプランニングスーパーバイザーら36人が参加した。

この日、道観光機構事業企画本部の生川副本部長が「北海道の観光における現状と人材育成」、小樽観光協会の永岡事務局次長が「小樽市の観光DX推進に関する取組」と題してそれぞれ講演した。

生川副本部長は、データに基づき、観光産業の現状について説明。コロナの影響で観光人材が流失したため、観光関連の人材の確保が課題であることや、観光コンテンツを強化させる重要性などを示した。

永岡事務局次長は、これまでデータ活用が不十分であった等の反省点を生かした実践を紹介。DXを活用した再来訪の促進や、PRをするターゲットの設定、ファンづくりなどに力を入れていることを伝えた。

参加者からは「観光関連人材の育成について知ることができた。特に宿泊業就業体験や訪日教育旅行の受け入れに関しては検討したい」「データを活用した観光振興や地域との連携の重要性等について、示唆に富んだ講演で勉強になった」「観光人材を育てることで、地域のホスピタリティーが向上し、観光客の再訪につながるという考え方に感銘を受けた」などの感想が寄せられた。

ＯＮＥ―ＴＥＡＭプロジェクト
専門高 価値・魅力発信へ
７年度 Ｓ７サミットなど
道教委

道教委が本年度から取り組んでいる「北の専門高校ＯＮＥ―ＴＥＡＭプロジェクト」における7年度の取組の方向性が明らかになった。拠点校同士の交流、役割等の共通認識を図る「拠点校ミーティング」、七つの職業学科の代表者らが一堂に会し産学連携を一層深める「Ｓ7サミット」、2年間の事業成果を共有する「ＯＮＥ―ＴＥＡＭフェスタ」などを計画。各種イベントを通じて産学連携を一層強化するとともに、専門高校の価値や魅力を広く発信し、魅力ある北海道を創る人材育成を進める。

本年度開始した同プロジェクトは、専門高校と企業や中学校等との連携を推進し、専門高校の価値や魅力を啓発する「縦のつながり」とともに、専門高校が学科の垣根を越えて連携し、静内農業高校をはじめとした効果的な取組を他の専門高校に自走可能な形で展開する「横のつながり」を構築するもの。

事業初年度の6年度は、静内農業高を拠点校に、各種ミーティングを通して、専門高校と産業界の持続可能な連携の在り方を発信。道教委高校教育課に配置している産学連携コーディネーターが各職業学科を担当する指導主事と協働し、専門高校と産業界の連携を支援してきた。

最終年度となる7年度は、専門高校や産業界等を対象としたイベント等を通じて、人的ネットワークを強化し、持続可能な職業人材育成システムを構築。中高生や教員が新たな産業構造や専門高校の価値・魅力を理解する機会を創出し、地域の担い手となる人材育成を推進する。

取組の推進に当たって、農業・工業・商業・水産の学科を設置する全道の専門高校から拠点校をそれぞれ1校設定。更別農業高校、室蘭工業高校、旭川商業高校、小樽水産高校の4校を選定した。

各拠点校は、7年度のはじめに「拠点校ミーティング」を実施。拠点校による事例発表や管理機関による事業概要説明を行い、拠点校同士の交流を深めるとともに、拠点校の役割の共通認識を図る。その後、各圏域で6、7月に産学連携シンポジウム、10、11月にＯＮＥ―ＴＥＡＭフォーラムを実施する。

全道の取組として、8年1月に「北の専門高校Ｓ7サミット」、2月に「北の専門高校ＯＮＥ―ＴＥＡＭフェスタ」を計画。

Ｓ7サミットは、本年度実施した「4Ｓサミット」をさらに発展させたもので、七つの職業学科の代表者や産業界関係者、産学連携コーディネーターらが一堂に会し、産学連携に資する講演を実施する。また、7年11月に予定している道産業教育審議会建議の概要を共有した上で意見交換等を行う。

ＯＮＥ―ＴＥＡＭフェスタは、プロジェクトの集大成となるイベント。2年間の事業成果を共有し、事業が終了する8年度以降の持続可能な産学連携につなげる。

本年度実施したオンラインセミナーについては、新たな産業の働き方に加え、専門高校の取組や魅力などを、高校教員だけではなく中学校の教員や産業界に広く発信。10月実施予定の「専門高校ユナイテッド」では、先行事例を有する他県の専門高校とタッグを組み、生徒、教員による協議等を行う予定。

7月実施予定の「専門高校魅力発見ミーティング」は、中学生の保護者や中学教員を対象にしたイベントをオンラインで開催。専門高校の価値や魅力を発信するほか、中高連携による成果等を発信する。

このほか出版物に関わって、本年度作成した「産業実務家教員リスト」をさらにアップデートし、関係者に配布する予定となっている。

北海道通信（日刊教育版）令和７年３月12日（水）

専門高の魅力を1冊に

道教委　おしごとガイドブック

卒業後の進路、連携事例等

道教委は、道内の専門高校の価値や魅力を1冊にまとめた「おしごとガイドブック」（中学生版・高校生版）を発刊し、道内の中学校、高校等に配布した。専門高校の卒業生で、卒業後に技術者として活躍する人たちの仕事内容・やりがいのほか、道内の専門高校と地域の企業、中学校等と連携した取組や、専門高校同士の学科の垣根を越えた連携事例などを紹介。道教委は、中高生が先端技術を活用する産業分野に関し、職業理解を深めるための参考資料として積極的に活用するよう呼びかけている。

ガイドブックは、道教委が本年度から文部科学省「マイスター・ハイスクール普及促進事業」を活用して取り組む「北の専門高校ONE－TEAMプロジェクト」の一環で作成したもの。専門高校が取り組んでいる「縦」と「横」のつながりにスポットを当て、専門高校卒業後、技術者として活躍している人たちの仕事内容ややりがいのほか、専門高校と地域の企業が連携した取組や学科の垣根を越えた専門高校同士の取組、中学校の技術科と連携した専門高校の取組などを掲載している。

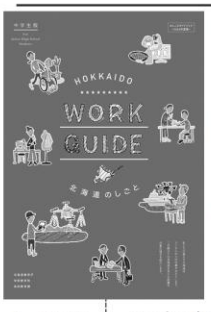
専門高校と地元企業による産学連携の事例をみると、厚岸翔洋高校では、潜水事業やドローン事業を手がける㈱大歩と連携し、スマート水産業に関する実践研究を推進。地域の漁業従事者との「海の見える化」に向けた取組などを展開している。

学科の垣根を越えた連携事例では、岩見沢農業高校と札幌工業高校の生徒が連携したビニールハウスのスマート化の取組を紹介。札幌工業高の生徒がビニールハウス内の温度・照度の自動計測や散水等の遠隔制御を可能にするシステムを開発し、岩見沢農業高のハウス内で行った実証実験の様子などを伝えている。

このほか、中学生版では、産学連携コーディネーターと専門高校で学ぶ高校生3人による座談会の様子を掲載。農業・工業・商業それぞれの専門高校における学習内容や産業界と連携した取組などについて語っている。

高校生版では、北海道の未来と地域を支える人材育成の取組を紹介。大学教授による半導体出前講座や洋上風力発電施設の見学、新幹線トンネル工事の見学など、各専門高校の特色ある教育活動を掲載している。

ガイドブックは、道教委高校教育課のホームページで公開している。



中学生版と高校生版を発刊した

北海道通信（日刊教育版）令和７年４月４日（金）

道教委　専門高56校に配布

産業実務家教員リストを作成

1日現在36社登録　今後も更新

道教委は、北の専門高校ONE－TEAMプロジェクトの一環で「産業実務家教員リスト」を作成し、道内の専門高校56校に配布した。企業名や連携が可能な地域、分野、内容などを集約したもので、1日現在で36社が登録している。リストは今後も更新していく予定で、道教委は、同リストを活用し、産業実務家教員と学校の連携が一層進むことに期待している。

産業実務家教員リストは、専門高校と連携が可能な各産業に従事する職業人または事業所をリスト化したもの。専門高校と産業界の双方にとってプラスになる持続可能な関係を構築すること、生徒に対して、高度な知識・技術や実践的・体験的な学習機会を提供することを目指している。

リストでは、企業名や地域、「建設DX」「半導体関連」など連携可能な分野のほか「出前授業」「職場見学」「インターンシップ」など専門高校と連携して実施できる内容などを集約。1日現在で36社が登録しており、リストは今後も更新していく予定だ。

道教委では、地域産業の人材育成に向け、産業実務家教員と学校が意見を交わすことで連携の強化が図られることを期待している。

マイスター・ハイスクール普及促進事業

「北の専門高校 ONE-TEAM プロジェクト」

令和６年度（2024 年度）成果報告書

北海道教育庁学校教育局高校教育課キャリア教育指導係
〒060-8544　北海道札幌市中央区北３条西７丁目　　TEL 011-204-5705
Web ページ　https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/sangyo_top.html